



どうしても、  
伝えたい



鳴海はるか

「健太〜!遅刻するよ〜？」

私は健太のうちの前で大きな声で呼びかける。

これが毎日の私の日課。

健太は私の家のお隣さんで、小さい頃からの付き合い、いわゆる幼馴染だ。

それにしても、まったく起きてくる気配が無い。今日は遅刻するわけにはいかない。なぜなら今日は高校入学の初日なのだ。

いつものように健太の家の門をくぐって玄関を開ける。

いつものようにおばさんが困った顔をして立っていた。

「ごめんね、美晴ちゃん。やっぱり私じゃ健太は起こせないみたい。」

「任せといてください。すぐにたたき起こして連れて行きますから。」

健太の部屋の前に立ち部屋のドアをバンッと開ける。

予想通り布団に包まって幸せそうな顔をして眠っている。

そんな顔に余計イラッときて思いっきり布団を引っ張ってやった。

健太の体がくるくると回りながらベッドの下の床にたたきつけられる。

「いてて……。」

さすがにかなりの衝撃を受けた健太は起きた。思い切りやりすぎてちょっと鼻血がでていたけれど……。

「さっさと支度しなさい！今日は入学式でしょ！もう遅刻寸前よ！」

私は学生服やら靴下やらを健太の方にポイポイ投げつけて、ドアの外に出て待った。

すぐに健太が出てきた。

「美晴、何でもっと早く起こしてくれなかったんだよ！？もう遅刻寸前じゃん！」

「あんた何いってんのよ！私が呼んでもまったく返事もしなかったのはあんたでしょうが！」

私たちは入学初日からアスリートのように、全力疾走する羽目になった。

本当にギリギリで何とか間に合ったが、二人ともゼエゼエと息を切らしていたから、周りからの視線が相当痛かった。

それはもう、まっすぐに前が見れないくらいに。

ちなみに何の因果か高校に入学したと言うのに、また健太と一緒にのクラスだったりする。

そこへ担任の先生が教室に入ってきた。

「そこ、早く席に着きなさい。」

二人して黒板で自分の席の場所を確認して席に着こうとする。と言うかもうみんな席について空席は二つしかない。

それを見て思わず叫んでしまった。

「あんたの隣!？」

「おまえの隣!？」

コントでもやっているかのようにハモってしまったので、周りから笑いが起こった。

・・・また恥をかいた。

席について隣をにらめつけてやったら、健太はそ知らぬふりをして向こうを向いてしまった。

まったく健太といると話題が尽きない。しかもそのほとんどに私も巻き込まれるんだから始末が悪い。

先生は式の事と今日のスケジュールをみんなに説明する。

今日はとりあえずこれから入学式を講堂で行ってホームルームをして終わりだったが、そんなことよりも健太がまた何かやらかさないかと気が気じゃなかった。

入学式の間は珍しく健太は静かにしていた。

・・・と思って健太の方を見たら、前後に大きく揺れながら気持ちよさそうに寝ていた。

「全員起立！」

みんなが揃って立ちあがる。けれど相変わらず健太は起きるそぶりを見せない。

私は自分の上履きを脱いで思いっきり健太の顔めがけて投げつけてやった。

ベチィッ！

「いでっ！！」

健太は目を覚ましてキョロキョロ周りを見回して慌てて立ち上がった。

健太の顔にはバッチリ靴底の跡がついていた。

周りもクスクスと笑っている。

健太は私のほうをにらみつけてきたが、私はそ知らぬふりをして向こうを向いてやった。

ふ～ん、お返しなんだから。

始業式が終わり講堂から戻ってくると、次はホームルーム。

先生が明日からの大まかな予定を言っていく。一通り言った後に、先生は一呼吸置いて言った。

「今からクラス委員を決める。立候補する者はいるか？」

誰も立候補する人はいなかった。

「ふむ。」

先生が仕方ないと言う感じで一言つぶやくと、こちらを見た。心なしに、いや、確実に嫌な予感がする。

「それでは立花健太、紺野美晴、この両名にクラス委員をやらしてもらおうかと思うがみんなどうだ？」

やっぱり予想どおりだった。クラスからはあふれんばかりの拍手が湧き上がっている。

健太はまんざらでもない様で立ち上がってみんなに両手を上げてみんなの拍手に応えていたが、私はこれからのことを考えて頭を抱えるばかりだった。

翌日。

不本意ながらもクラス委員となってしまった私は、いつもよりも早く起きていつものように健太を起こしに言った。

クラス委員が遅刻するわけにはいかない。

健太はブツブツ文句を言いながらも学校へと向かった。

今日はがんばっただけあって早く学校へ着くことができた。たぶん健太と一緒に登校した中で一番早かったと思う。

教室へ行くとさすがにまだ登校してきている生徒もいなかった。

担任の先生だけがもう教室に来ていた。

先生は私たちの顔を見ると声を掛けてきた。

「ちょっとこのプリントを配りたいから手伝ってくれないか？」

「えー。こんなに早く登校してみたらこれかよー・・・。」

健太が早速文句を言い出した。

「あんたね、クラス委員になったんだから先生に言われたことはちゃんとするの！だいたい昨日はまんざらでもないようだったのは誰よ？」

「いや、あれはみんなに応えてあげないと悪いじゃん？それに本当は別になりたくてなったわけじゃ・・・。」

「いいから黙ってやるの！グダグダ言ってる間にできるでしょ？」

ちえっ、と言いながらも仕方なさそうに健太も言われたとおりに配り始める。

私たちの一連の会話を見ていた先生が言った。

「お前たちを見てるとまるで夫婦みたいだな！」

私は先生の突然の言葉に真っ赤になってしまった。今まで仲が良いとかコントみたいだとかは言われても、夫婦だなんていわれたことは無かった。

健太の方をチラッとみると、健太も少し照れたような感じで落ち着かないようだった。

みんなが登校してきて授業が始まる。

相変わらず時折健太が変なボケやら突っ込みをしては、私があるたびにそれに応えているといった感じだった。

ただ、本当に微妙なんだけど健太の様子がおかしい気がしていた。

そう思いつつも、特に何もなく放課後になった。

帰る支度をしていると担任の先生から明日使う授業のプリントの印刷を、健太と私に手伝ってほしいと言われた。

「分かりました。」

私はすぐに手伝いに職員室に向かおうとしたが、

「先生、美晴ごめん！今日は用事あるから帰るわー！」

といってカバンをつかんで走って行ってしまった。私は叫んで呼び止めようとしたけど、まったく止まることなく姿が見えなくなる。

仕方なく一人で先生の仕事を手伝えることにした。

思ったよりも先生の手伝いに時間がかかったけど、ようやく終わって帰ろうと自分のカバンを持った。

職員室を出ようとしたそのときだった。

「1年生の立花健太が交通事故にあったそうです！」

私は慌てて自分の家へと走った。そんな、健太が事故なんてどういうこと？そういえば詳しい状況を聞くのを忘れたとか、そんなことが頭の仲をぐるぐる回る。

そんなことを考えている間にもう家まですぐという時。

健太は私の家の前に立っていた。

私は一気に力が抜けてその場にへたり込んでしまった。

顔を上げて健太の顔を見ようとする。健太の顔は逆光になっていてよく見えなかった。

「もう。あんたが事故にあったって聞いたから私びっくりしてここまで走ってきちゃったじゃん。」

安心して涙がにじんできてしまう。健太に見られないように俯いてそっと涙をぬぐった。

いつもならだいたいこれくらいのタイミングで健太の軽口が飛んでくるのに、今日はそれが無い。

代わりに健太の手が差し出された。

「これ。今日お前誕生日だろ？誕生日プレゼント。」

シルバーのネックレスにハートのリングがついたネックレス。いつだったか私がほしがったやつだ。

今まで健太が誕生日プレゼントをくれたことはない。

まさかのサプライズに、引っ込んだ涙がまた出てきてしまう。

「あとさ、俺まだお前に伝えたいことがあるんだよ。いつも起こしに来てくれてありがとな。その他にもさ、いつもいろいろ助けてくれたじゃん。ありがとな。」

「そんなこと別に気にしなくていいよ。私が勝手にお節介やいてただけだから。」

「まだ伝えたいことがあるんだよ。」

そこで健太は一呼吸置いた。

「俺、お前のことが好きだ。ずっと好きだったよ。ガキの頃から。」

「私も、私だって好きだった。じゃなきゃあんなに世話やかないよ・・・。」

私は涙でぐちゃぐちゃになった顔を見られるのが恥ずかしくて俯いたまま両手で顔を覆っていた。

「ありがとな・・・。」

健太の手が優しく私の頭に置かれたかと思ったら、急にそれが軽くなった。

私が顔を上げたときにはもう、健太の姿はなかった。

その後、家の前で泣きながら健太の名前を叫んでいるところに母が現れた。

そして――健太の死を聞かされた。

私は泣きながら、必死にそれを否定しようとした。

健太とさっきまで話していたこと。

ネックレスをもらったこと。

母はただただ私を抱きしめながら、それを聞いてくれた。

「それはきっと、健太くんが最期に美晴にどうしても伝えたくて逢いににきてくれたのね……。」

それからやっと少し落ち着いた私は母から聞かされた。

健太はどうやら私に渡すために、あらかじめ予約しておいたこのネックレスを取りにいった。

そして店から出てすぐのところで居眠り運転のトラックに轢かれたと。

次の日、私は健太からもらったネックレスを身に付けてお葬式に出た。

それでもいまだに私は今でも健太が死んでしまったなんて信じたくないし、信じられなかった。

だけど、目の前には健太の笑った写真の下にお棺が置いてあった。

私は震える手足を何とか動かしてその前に立った。

健太のご両親がそのすぐ隣に立っていた。

「美晴ちゃん、今までありがとう。よければ健太の顔を見てあげて……。」

促されるまま私は健太の顔を見た。その顔はとても綺麗で、満足そうな笑顔を浮かべていた。

私は人目もはばからずにわんわんと泣いた。健太、健太！

健太からもらったネックレスがひんやりと冷たかく、それが健太がこの世からいなくなってしまうと告げているように感じた……。



どうしても、伝えたいこと

<http://p.booklog.jp/book/65886>

著者：鳴海はるか

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/fd3sharuka/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/65886>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/65886>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ